

王朝文学における「牛飼」と「牛飼童」

岡田 ひろみ

一 牛車を進行させる者

平安時代の貴族たちは移動するとき、「車」を利用した。

・御車入るべき門は鎖したりければ、（光源氏は）人して惟光召して待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、……（夕顔①一三五頁）

・（光源氏）「よし後にも人は参りなむ」とて御車寄せさせたまへば、（紫の上の乳母たちは）あさましう、いかさまにと思ひあへり。（若紫①二五五頁）

前者は、光源氏が大弐の乳母の見舞いに五条の家を訪ねた際、門が閉まつていたのでしばらく大路の様子を「車」の中から見渡している場面であり、後者は光源氏が幼い紫の上を、北山から二条院に連れ去るため、簀子（縁先）まで「車」を寄せさせる場面である。門が開くまで「車」の中で周囲を見渡す待ち時間に、小家に咲く白い夕顔の花に目をとめ、それが後に「夕顔」と呼ばれる素性しれぬ女君との出会いにも繋がった。また、紫の上との乳母のみを「車」に乗せ、二条院に連れ去りながらも、その後紫の上の父兵部卿宮に知られないのは、光源氏が連れ去りを口止めしただけでなく、「後にも人は参りなむ」と、他の女房たちのつきそいを後回しにし、光源氏の「車」一両

ですばやく移動したためであろう。「車」は出会いの機会ともなり、誘拐も可能にする。

「車」に付き従う者から、その乗り手の正体も判断される。

（良清・惟光）「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。御方々の里人はべりつる中に、四位少将、右中弁など、急ぎ出でて送りしはべりつるや、弘徽殿の御あがれならむと見たまへつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」と聞こゆるにも、（光源氏は）胸うちつぶれたまふ。

（花宴①三五九〜三六〇頁）

従者たちは、「車」と同行するのが「四位少将、右中弁」（右大臣の子息であり、弘徽殿女御の兄弟）であると告げる。この言葉は、光源氏が花の宴のあと出会った女君（朧月夜の君）が、東宮妃候補で、政敵側の姫君であることを光源氏に、さらにいえば読者に知らせる役割を果たしている。

これらに描かれる「車」とは言うまでもなく牛車のことである。牛車が、貴族の生活に必要な不可欠なものであり、王朝文学の中で、「利用する人々の権威や身分はもちろんのこと、生活環境や人間関係の深層まで照らし出す乗物」（注1）といわれているように、日記や物語の中でも重要な機能を果たしている。そして、その牛車を進行させる役割を担うのは、牛飼童と呼ばれる者だった。しかし、『源氏物語』において数多くの「車」が描かれても、いわば運転手役の彼らはほとんど描かれない。そもそも身分高い貴族が「車」を利用する際には、「惟光召して車のこと仰せたり」（葵②二七頁）のように、まずは腹心の部下に伝えるからどのような牛飼童がどのような牛を引いているかなどに目をとめる必要性はなかったのかもしれない。

とはいえ、牛飼童が『源氏物語』の中に描かれないわけではなかった。一例のみだが存在する。

（薫は）のたまひしまだつとめて、睦ましく思^{おほ}す下臈侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出でて（尼君のもとに）遣はす。
 『源氏物語』 東屋卷⑤八八頁

ここには、三条の小家に身を寄せる浮舟との手引きを依頼するために、薫がわざわざ牛車を宇治に住む尼君のもとへ派遣した様子が描かれている。故八の宮の落とし胤とはいえ、今は受領の継娘にすぎない浮舟との交渉を、世間に隠すべく、薫は細心の注意を払う。それが、「睦ましく思^{おほ}す下臈侍一人、顔知らぬ牛飼」（注²）を選択したことにあらわれている。「下郎侍」は牛車の警備に当たる者であり、下級侍ではあるが、「睦ましく」とあるから、薫が常々身近に使い、信頼を寄せている者なのだろう。一方、「牛飼」（牛飼童の略称）は、「顔知らぬ」者が選ばれている。『源氏物語』に「車」が一四〇例近くも記されるのに対して、その牛車を引く牛飼童が登場するのはこの場面しかない。それだけに「顔知らぬ牛飼」とは、牛飼童にまで配慮する慎重な薫の姿を強調しているといえるだろう。また、「下郎侍」や「顔知らぬ牛飼」という言葉の向こう側に属する「浮舟」の身分・階層が意識される言葉ともいえるだろう。もちろん、既に述べたように貴族社会を舞台とする王朝文学作品の中に、身分低い職に付く者たちがほとんど描かれないのは自然なことともいえる。しかし、だからこそ、なぜ描いたのか、という疑問が湧き上がってくる。貴族にとって、「牛飼童」とはどのような存在だったのだろうか。

二 「牛飼」と「牛飼童」

牛飼童は、「牛車の牛を使い、牛車を進行させる者。垂れ髪で、水干を着用し、むちを手に持ち、童の姿をする。三〇歳、四〇歳に至る者もある」（『日本国語大辞典』小学館）と説明される。その姿までわかっているのは、絵巻などに牛

車が描かれる際には、必ずといってよいほど牛飼童も描かれることによる（注³）。成人でも童の姿するのは、牛という「獐猛な動物を統御する上で、童の持つ呪的な力が期待された」（注⁴）からだという。また、雑役・雑用をするような階層は「人」ではないという位置づけで、「童」の社会的な身分も表してもいたため「牛飼童」と呼ばれたという（注⁵）。和文だけでなく、例えば『和漢朗詠集』『山家』（杜荀鶴）には、

漁夫の晩船は浦を分つて釣る

牧童の寒笛は牛に倚つて吹く

とあり、「寒々とした牛飼の笛の音」（注⁶）をうたう漢詩でも「牛飼」は「牧童」と記される。

といつても、牛飼童が「牛飼童」と記されることはそれほど多くはない。前引の東屋巻がそうであったように、「牛飼」という略称が目立つ。「牛飼童」は成人しても、さらにいえば高齢でも牛飼童であった。「童」が社会的身分も表したとはいえ、年齢的に「童」ではない「牛飼童」を「牛飼童」と呼ぶことへの抵抗感のようなものがあつたのかもしれない。『うつほ物語』には、「牛飼童」ではないが、

かくて、京に住むにも、もの食はせ衣着でも使はるる人なし、「内裏に参らむ」とては、板屋形の車の輪欠けたるに、
迫りたる牝牛を懸けて、小さき女の童をつけて、……（藤原の君巻・八五頁）

と、吝嗇で有名な『うつほ物語』の三大奇人、三春高基が儉約のために、牝牛を車につけ、しかも小さい女の童を牛飼童の代わりにしている、というエピソードが紹介されている。通常の牛車は牝牛が引くらしいから、「迫りたる（貧弱な）牝牛」「小さき」女童というのは、「牛」や牛飼童にいたるまで神経をつかう、尋常でない儉約ぶりがうかがえる。

平安時代の王朝文学作品の中で「牛飼」「牛飼童」の記載はそれほど多くはないが散見される（注7）。記載があるのは、八作品で内訳は、次のようになる。

『うつほ物語』 「牛飼」五例（二例は絵指示）

『落窪物語』 「牛飼」三例

『枕草子』 「牛飼」三例（二例は一本）「牛飼童」二例（二例は一本）

『源氏物語』 「牛飼」一例

『狭衣物語』 「牛飼」一例 「牛飼童」一例

『讃岐典侍日記』 「牛飼」一例

『栄花物語』 「牛飼童」一例

『大鏡』 「牛飼」五例

「牛飼」が一九例、「牛飼童」が四例と圧倒的に「牛飼」という語が多い。「牛飼」には「牛飼童」という意味以外に、「牛を飼い使う者。牛車の牛を飼い使う者」（『日本国語大辞典 小学館』の意味もある。そこで、「牛飼」「牛飼童」それぞれについて、作品ごとに確認し、どのような存在として描いているか探ってゆく。

三 卑賤の者としての「牛飼」

『うつほ物語』には五例もの「牛飼」が登場するが、使用される箇所は物語前半に偏っており、藤原の君巻に四例（うち一例は絵指示）、忠こそ巻に一例である（注8）。まず藤原の君巻をみてゆく。上野の宮のあて宮略奪計画をした正頼は、先手を打って、下仕えの器量良い娘を偽あて宮として仕立て上げて、上野の宮主催の法会に送り込む。

かくて、この寺には、今日の色節いろふしにて、けしからぬ、いと多かり。遊びの所には、嵯峨の院の牛飼かうぎ、講説かうぜつのところで、講説の長、樂とては、鼓打ちて遊びす、講説とては、こしきする真似をす。かかるほどに、大將殿（正頼）の御車、御前ごぜん三十人ばかりして立ちぬ。親王みこの君（上野の宮）、「しそしつ」とて仰すやう、「御講始めよ」とのたまへば、牛飼かうぎ辻遊びす。濫僧ども集まりて、声を合はせてののしれば、物見に來たる人々、いとほしくもあり、をかしくもあり。博打、京童部、数知らず集まりて、一の車を奪ばひ取る。殿の人々空騒ぎすれば、車の簾を掲げてのたまふ。（上野の宮）「（あて宮を）奪ひ得つ。これやこの、惜しみたまふ御娘。なめき罪ぞ謀らるる。疎かなる罪ぞ凌ぜらるる。双六のぬしたち」と言ひて、牛飼ども、田鼓でづども打ちて、草刈笛吹く。

絵指示　こは、寺。濫僧、牛飼、集まりてをり。博打、京童部、車奪ひたり。親王の君、片足切して、車に走り乗り給へり。（藤原の君卷・八三〜八四頁）

にぎやかな法会の喧噪にまぎれるようにして、上野の宮は偽あて宮とは知らずに、その略奪の成功を喜ぶ。ここで偽あて宮が乗る「車」を奪ったのは「博打」や「京童部」であるが、「遊び」（樂）で場をにぎやかす一員として描かれたのが「牛飼」であった。この「牛飼」が「牛飼童」なのか、「牛を飼ひ育てる人」なのかは不明であるが、共に描かれている「草刈」が、牛馬の飼料を刈り取る人夫なので、「牛を飼ひ育てる人」と考えるのが穏当か。少なくともこの「牛飼」は、牛車を引くために描かれているわけではない。大道芸人のように、「辻遊び」をし、鼓を鳴らす。上野の宮に貢献した他の人々も、「濫僧」「博打」「京童部」といった卑賤の者たちであるから、ここでの「牛飼」の記述も、上野の宮を半貴族的な存在として描くための取り巻きの一人として記されていると考えられよう。

次に、忠こそ巻をみてみたい。

……（故忠経の北の方は）山々に修法を行はせ、夏・冬の御装束、朝・夕さりの御膳もくに多く物を尽くして、頭かしらより足末あなすままでに、綾・錦を裁ち切りて、見給はむ草・木まで着せ飾らむ、このおとど（千蔭）に仕まつらむ、上下の、草刈・牛飼まで飽き満たせてあらせむ、わが身のならむをも知らず、まして、仕まつらむ人のならむ、はた知らず。（忠こそ巻・一一四頁）

夫亡きあと、故忠経の北の方は、二〇歳も年下の千蔭の大臣に懸想し、その愛を得るため、財産を惜しみなく使う。千蔭が目にするであろう草木を着飾らせ、身分の上下を問わず千蔭に仕える「草刈・牛飼まで」十分に満足させようとする。ここでも、前引の藤原の君巻と同じく、身分の「上下」の中でも、「下」最下層にいる存在として「草刈・牛飼」をあげている。

最下層の指標としての「牛飼」は、次にもあげる『落窪物語』でも同様のことがいえる。

かの御事（少将のなさること）になれば、おとど笑みまけたまへれば、殿につかうまつる人、**雑色、牛飼まで**この少将殿になびきたてまつらぬなし。（『落窪物語』巻二 一六七頁）

父「おとど」が「少将殿」（道頼・男主人公）をかわいがるので、屋敷に仕える人は、「雑色・牛飼まで」、少将を慕わない者はいない、という。「雑色・牛飼」とは、「草刈・牛飼」と同じく、低い身分の例として用いられている。「雑色」は屋敷の雑務に従事した無位の小者をいうので、この「牛飼」は屋敷で雇われている牛飼童というのだろう。身分の上下を問わず、邸内のすべての人は、道頼がすることに反対する者はいない、牛飼童のような卑賤の者までも、

というのである。次も道頼にかかわる文脈での「牛飼」の例である。

男どもも少なくて、えふと引きとどめず。御前三、四人ありけれど、「益なく旅のいさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼に手触れてむや」と言ひて、人の家の門に入りて、立てり。(巻二 二〇五頁)

今の「太政大臣」の尻を蹴っても、「この殿」(道頼一族)の「牛飼」には手も触れない、という極端な比喩表現は、太政大臣よりも、道頼一族の権勢があったことを上手く伝えている。「殿の牛飼」だから、ここも牛飼童というのだろう。

次は中納言(落窪女君父)と、女君・子の対面に際して、父中納言の感動を示す文脈の中で登場する。

……御台まゐり、御供の人にも、わざとの設けにはあらで、牛飼までにいと清げにあるじたまふ。(巻三 二四六頁)

「わざとの設け」ではなくとも、「身分の低い者まで饗応することをあえて書いているところに作者の視点がある」(注9)と指摘するように、身分の低い「牛飼まで」接待したと記すことで中納言が女君やその子どもと対面できた喜びを表している。この牛飼も女君やその子どもの移動に携わった牛飼童をいう。

以上、『うつほ物語』『落窪物語』の「牛飼」を確認したが、牛を飼う人の意でも、牛飼童の意でも、卑賤の者の代表として描かれていることがわかる。

次に、『大鏡』の五例をあげる。実頼の童名は「牛飼」といったらしい。

（世次）おとど（実頼）の御童名をば「牛飼」と申しき。されば、その御族は、牛飼を「牛つき」とのたまふなり。
（『大鏡』実頼伝 九八頁）

当時、「犬・牛など丈夫な動物の名を入れた命名はよく見られる」（注10）というが、「牛丸」などではなく、「牛飼」と職名をそのまま使用している。牛飼童のように頑丈にたくましく育つように、という命名であろうが、『古事記』には、「……（二王は）其の国人、名は志自牟が家に入りまして、身を隠して馬甘、牛甘に役ちき」（下巻・安康天皇条・三三七頁）というように、二王が「馬甘、牛甘」の仕事につくという記事があり、その二王は後に仁賢・顕宗天皇となるから、卑賤のものと聖なるものを重ねる意識もみてとれる（注11）。

次にあげるのは、朝光のエピソードの中に描かれる「牛飼」である。朝光は、元の北の方のもとに牛車で出かけようとするが、「牛飼・車副」が朝光に従わない。

世次「さて、時々、（朝光は）もとの上の御もとへおはしまさむとて、牛飼・車副くるまのふなどに、「そなたへ車をやれ」とて仰せられけれど、さらに聞かざりけり。この今北の方、さぶらふ雑色・隨身・車副などに装束くもの取らすることはさるものにて、日ごとに酒を出だして飲ませ遊ばせ、いみじき志どもをしける。その故にや、かくしけるを、それまたいとあやしき御心なりや。雑色・牛飼の心にまかせて、それによれてえおはしまさざりけむよ。（『大鏡』兼通伝 二一九頁）

世次は、今の北の方が「雑色・隨身・車副（牛車の左右につきそう従者）など」に衣装を与え、酒を飲ませ遊ばせ心付けをし、夫朝光が元の北の方のもとへ行けないように邪魔をした、と語る。通い婚である当時、大納言の地位にいた朝光が牛車を使わず外出すること身分柄よくないとされていたから、今の北の方は牛車に拘わる従者たちを味方につけることで朝光の「足」を封じたのである。ここでの「牛飼」は牛飼童の略称であり、牛車を進行させる者として描かれている。他の従者たちと同じく褒美に釣られ、男主人の言うことを聞かない従者として造型されている。女主人が「牛飼」のような卑賤な者にまで気を配り、利用するのは、『うつほ物語』忠こそ巻の北の方の性質と共通する。

最後に道長伝の「牛飼」をあげる。

かかれば、この御世の楽しきことがぎりなし。そのゆゑは、昔は、殿ばら・宮ばらの馬飼・牛飼、なにの御霊会、祭の料とて、銭・紙・米など乞ひののしりて、野山の草をだにやは刈らせし。……（『大鏡』道長 三三三頁）

世次は、道長の治める世がこの上もなく楽しい、と言い、昔は「馬飼・牛飼」が御霊会などの催しで銭や米をせびり、野山の草を刈り取ることをさせなかった、という話をあげる。「馬飼」は馬を飼う人のことなので、この「牛飼」は牛を飼う人の意味で用いられているよう。昔の治安の悪さ、素行の悪さを語る際に、「馬飼・牛飼」が例に出されている。この「牛飼」は、『うつほ物語』で上野の宮に味方した「牛飼」の属性に近い。

以上、「牛飼」の用い方を確認してきたが、牛を飼う人、牛飼童の略称、半々くらいで使用されている。どちらにしろ、ここにとりあげられる「牛飼」は、童名としての「牛飼」をのぞき、卑賤な者の代表として描かれることがほとんどであった。最下層の身分の事例として、いわば比喩表現として用いられているのが「牛飼」だったといえ

る。そうとらえると、次の『讃岐典侍日記』に出てくる「牛飼」も作者の心象を託すものとして読みたくなってくる。愛する堀河天皇の死後、悲しみに沈む長子は、次の鳥羽天皇への宮仕えを目前にしつつも、堀河天皇の月命日に大雪の中、堀河院に向かう。

道のほど、まことに耐へがたげに雪降る。車のうちに降り入りて、**雑色、牛飼、みな頭白く**なりになり。牛の背
中も、白き牛になりになり。（『讃岐典侍日記』四三六頁）

「雑色、牛飼」や「牛」に積もる雪の描写から、いかに当日が大雪で、周囲の反対をおして長子が牛車で堀河院に参上しようとしたかが窺える。雪を「耐へがたげ」に感じるのは、「雑色、牛飼」であり「牛」であり、長子でもあるのだ。例えば『紫式部日記』の中で、紫式部が、

御輿むかへたてまつる船染、いとおもしろし。寄するを見れば、**駕輿丁**の、さる身のほどながら、階よりのぼりて、いと苦しげにうつぶしふせる、なにのこととなる、高きまじらひも、身のほど限りあるにいとやすげなしかしと見る。（二五三―二五四頁）

と、土御門行幸に際して天皇が乗る輿をかつぐ駕輿丁が地面にはいつくばるのを見て、自身が宮仕えする苦悩と重ねる場面を思い起こさせないだろうか。式部と同じように、それと同じように、長子は、卑賤の者である「雑色、牛飼」の姿に、意にそまぬ鳥羽天皇への宮仕えを強いられる自分と重ね、日記にその苦悩を描いているのではなからうか。

四 「牛飼童」と描かれるとき

前節において、卑賤の者としての「牛飼」について確認したが、「牛飼」を一人の人としてとりあげ、何度も描くのが『枕草子』だった。『枕草子』には「牛飼」「牛飼童」の両方の例が見られるが、まずは「牛飼」についてみてゆきたい。

そもそも『枕草子』には「牛飼は」という章段があり、

牛飼は、大きにて、髪あららかなるが、顔赤みて、かどかどしげなる。（『枕草子』「牛飼は」一一一頁）

と、「牛飼」は体が大きく、髪が「あららか」（注12）（風に吹かれ逆立ち乱れている感じか）で、「顔赤み」（血色が良く）、「かどかどしげ」（注13）（気がきく）者が良い、と記している（注14）。章段の配列でいうと、「雑色・隨身は」、「小舎人童」の続きにこの「牛飼は」があり、貴族に仕える従者の一人として、「牛飼」を見、その理想的な姿を記している。「小舎人童、小さくて、髪、いとうるはしき」に対して、「牛飼は、大きにて、髪あららかなる」と書き出し、小舎人童との対比で「牛飼」が描かれる。また、「すさまじきもの」の章段では、

すさまじきもの 昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼。ちご亡くなりたる産屋。……（『枕草子』「すさまじきもの」五八頁）

という冒頭部分で「牛飼」をとりあげており、牛を死なせた「牛飼」を、「すさまじきもの」（不調和な感じ）として掲げている。この箇所は、「牛憎みたる牛飼」という本文もあり、その場合は「牛ありての上の牛飼なるに、その牛を邪見にする牛飼は不快」（注15）という牛飼童の牛に対しての態度の不調和をさす。どちらにしても、前者はもち

ろん、ここで描かれる「牛飼」が、これまでの例と違って、卑賤な者という要素を取り上げているわけではないことが興味深い。

次に同じく『枕草子』の「牛飼童」について触れている「心にくきもの」の一節を引く。

ことにきらきらしからぬをこの、高き、短きあまた連れだちたるよりも、すこし乗り馴らしたる車のいとつややかなるに、牛飼童、なりいとしきつぎしうて、牛のいたうはやりたるを、童はおくるるやうに綱引かれてやる。

（『枕草子』「心にくきもの」三三三頁）

「心にくきもの」はかなり長い章段で、様々な「心にくきもの」が掲出される。「牛飼童」というような下層階級の者は、「心にくきもの」、つまり奥ゆかしさを感じる対象ではないように思うが、それほど目立つこともない「をのこ」が連れだっているのよりも、「牛飼童」がふさわしい身なりで、はやりたつ牛を、牛に引つ張られるような形で車を進行させる（のが奥ゆかしい）と記している。後文、「牛飼はおくるるやうに」ではなく「童はおくるるやうに」と「牛飼童」の略を「童」と用いているのも、「心にくき」感じを演出するためであろうか。牛飼童をあえて「牛飼」という略称を使わず、それぞれ「牛飼童」「童」と表しているように思う。

『栄花物語』の次の例も、「童」を意識して「牛飼童」を記していると考えられる。

中納言殿（隆家）は京出ではたまひて、丹波境にて御馬に乗らせたまひぬ。御車は返し遣はす。年ごろ使はせたまひける牛飼童に、「この牛はわが形見に見よ」とて賜へば、童伏しまろびて泣くさま、ことわりにいみじ。御車は都に來、わが御身は知らぬ山路に入らせたまふほどぞいみじき。（『栄花物語』巻第五 浦々の別 ①）

二五一頁

京を牛車で出た隆家が、丹波境で馬に乗り換えなければならなかったために、長年使っていた「牛飼童」に別れの言葉を伝える場面である。「この牛はわが形見に見よ」という言葉からは、「牛」は隆家の所有物であること、隆家にとつて「形見」となるほど愛着もあることがうかがえ、牛飼童の「伏しまろび」ながら泣く様子から、下賜された感動と別れねばならない悲しみが伝わってくる一文である。中納言と「牛飼童」の別れを描くこの一コマは、二人の身分の隔たりを思えば不自然にも感じるが（注）、下層に属する「牛飼童」は「都」に、隆家は「知らぬ山路」に入らなければならぬという落魄する隆家の姿をより一層引き立たせるといえよう。さらに、『過去現在因果経』などにみえる「車匿童子」が、雪山の麓まで悉陀太子を送りて、馬を引帰れるさま」によせた表現であるという指摘（注）をふまえれば、この箇所は「童」という語が重要であつて「牛飼」という略称ではなく、あえて「牛飼童」「童」と記された場面であるといえよう。

最後に『狭衣物語』の「牛飼童」「牛飼」について考えたい。男主人公、狭衣中将は、車で移動中、女車とすれ違う。明らかに身分が上の狭衣に道を譲らず、強引に走り去ろうとしたこと、女車なのに僧が乗っているらしいことを不審に思った隨身（狭衣の従者）は、声をかけ牛車をとめた。

たそがれ時のほどに、二条大宮などわたりに会ひたる女車、牛の引き替へし、遠きほどよりかと思ゆる。側の物見少し開きたるより、円頭のほの見ゆるは、この御車を見るなるべし。はやくやり過しつれば、あやし、ひが目かと思すに、供なる童の持たる物やしるからん、この御供なる隨身など見つけて、かやかやと追ひ留むるに、え逃げで引き留められぬ。（中略）。御車を留めたまひて、（狭衣は）「かくなせそ」と言はせたまへば、（隨身は）

法師をば逃がして、牛飼童を捕へつつ、「(先ほど逃げた法師は)何者ぞ」と問へば、(牛飼童)「仁和寺に某威儀師と申す人なり。年頃、懸想したまへる人の、太秦に日頃籠りたまへるが、出でたまふとて車借りたまへれば、喜びながら奉りたまひて、姫君(飛鳥井女君)一人を盗みて、率ておはするなり。法師だてら、かくあながちなるわざをしたまへば、仏の憎みたまひてかかるめを見せたまふなり。……」とて、いと恐ろしく悲しと思ひたるに、いとをかしうて許してけり。(『狭衣物語』巻一 七六頁)

僧具とあきらかにわかるものを持つていた「供なる童」は隨身にとめられる。従来、この「供なる童」は「牛飼童」と同一人物として理解し読まれている。荷物持ちをしつつ、牛車の進行にも携わるのはなかなか難しそうな気もするし、この童は寺に仕える童子ともとらえられそうだが、『狭衣物語』の本文を読む限りでは、やはり同一人物として考えるのがよいだろう。そして「牛飼童」は成人後も「童」姿であるが、当該箇所「牛飼童」は「供なる童」としてまず登場していることから考えても、「童」(少年)として描かれているといえようか。隨身に捉えられた「牛飼童」は、法師の出自、逃げた理由等、具体的に理路整然と語った。その様子が「いとをかし」と受け止められて許されるわけだが、その口上だけでなく、「童」、つまり子どもであることも許された理由なのではなからうか。「牛飼童」の発言から、車には誘拐された「姫君」が乗っていることが明かされる。『源氏物語』をはじめ、「童」が男君と女君の「恋」の展開に用いられることがすでにいわれているように、狭衣と姫君(飛鳥井女君)との恋の契機に、この「牛飼童」が用いられているといえよう。

再度、この牛飼童は登場する。

ありし牛飼、ここにて物語りければ、(乳母)「いとあさましかりけることかな。また、誰といふ人、さるわざし

たまひつらん。我が君（飛鳥井女君）、いかになりたまひぬらん。行きて見よ」など言ひ騒ぎけるほどに、かくておはしたり。（巻一 八六頁）

飛鳥井女君の乳母に対して、「ありし牛飼」が女君誘拐と救出にまつわることの経緯を報告している。乳母は動転して「牛飼」に「行きて見よ」と「我が君」を探すようにいう。女君の探索を「牛飼」に命じるしかない、というところに生計の苦しさもみてとれる。「牛飼」と「童」は付かず記されていることも、あえて深読みすれば、中納言の娘とはいえ、両親と死別し、乳母のもとに身を寄せるしかない女君の、狭衣との身分差、階層を表す文脈の中で用いられた言葉といえようか。飛鳥井女君の物語が、『源氏物語』の夕顔や浮舟の物語と重なることについてはよく知られているが、「牛飼」という語を通して、最初にあげた『源氏物語』東屋巻の薫との身分差、浮舟の階層と響き合う。

五 「牛飼」「牛飼童」という表現

ここまで、「牛飼」と「牛飼童」が記される作品をとりあげ、どのように、なんのために描かれるのか考察してきた。「牛飼」とある場合は、たいていの場合、「卑賤」の者としての属性を強調して用いられていることが多かった。『枕草子』『牛飼は』や「すさまじきもの」のような例外もあるが、この場合は、前後の文脈（章段）からみて、「小舎人童」↓「牛飼（童）」、「牛死にたる牛飼」↓「ちご死にたる産屋」（牛飼（童）↓ちご（乳児）」という連想があるうことを付け加えておきたい。「牛飼童」と描かれる場合は、「牛飼」としてのみならず、その「童」としての属性も重要視した用いられた方がされていることも窺えた。特に、「牛飼童」を「牛飼」という略称ではなく「童」という略称をもつて記しているときにはそれが顕著である。作品を読む場合も「牛飼」でもあり、「童」でもあるということに留意し

ながら読む必要がある。

以上、王朝文学の中で、「牛飼」「牛飼童」がどのような意味を持つてくるのか、また「牛飼」と描くか、「牛飼童」と描くか、それぞれ使い分けの意識が働いていることは明らかにできたかと思われる。本稿では、諸本間の異同（注17）や、説話や軍記物語についての目配りまでできなかったが、こちらは今後の課題としたい。

※本文引用は『うつほ物語』は室城秀之『うつほ 全』（おうふう）、それ以外は新編日本古典文学全集（小学館）による。

注1 石坂妙子「平安時代の交通手段——輿車・馬・船——」（倉田実・久保田孝夫編『王朝文学と交通』竹林舎）

注2 別本系の池田本では、「顔見知るまじき牛飼一人」とある。

注3 松本麻衣子「絵巻の牛飼童」（『大谷女子大国文』30号 二〇〇〇年）。松本氏は、『古事類苑』『故實叢書』『廣文庫』などの百科事典類を参考に、牛飼童の特徴が「①髪型は垂髪元結 ②着物は水干、狩衣、如木 ③持ち物は鞭、牛に繋がれた綱、轅を支える榻など ④牛、または牛車の側にいる ⑤牛飼童の履物は、草鞋、草履」であることを確認した上で、これまで絵巻で牛飼童と判断されている中には小舎人童や寺院の童子がいることを指摘する。櫻井芳明『ものと人間の文化史 牛車』（法政大学出版局 二〇一二年）は、奈良時代から江戸時代までの乗用具についての全体像を把握しようとしたものである。中に牛飼童や牛の扱い方について、従来の研究史をまとめる形で解説している。

注4 網野善彦「童形・鹿杖・門前 再版「絵引」によせて」（『異形の王権』平凡社 一九八六年）

注5 黒田日出男「変わる童子の姿」（『絵巻 子どもの登場』河出書房 一九八九年） 多田一臣「童」（秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会 二〇〇〇年）。

注6 新編日本古典文学全集頭注。「牧童」を「牛飼」とする。

注7 『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』『更級日記』『堤中

納言物語』『浜松中納言物語』『夜の寢覚』に記載はない。ただし「牛飼ひて」等、動詞の連用形として用いられている例は除いている。また、例えば「御車にたてまつりて、(宮は式部に)よろづの事をたまはせ契る。心えぬ宿直のをのこともぞめぐり歩く。れいの右近の尉、この童とぞ近くさぶらふ。」(『和泉式部日記』)の「この童」を牛飼童とするものもあるが、日記の冒頭から登場している小舎人童であることが妥当であろうし、用例に数え上げていない。ひとまず「牛飼」と明示しているものに限った用例数である。『日本霊異記』や『今昔物語集』、『源平盛衰記』などには「牛飼」「牛飼童」が散見されるが、今回説話集や軍記物語は対象としなかった。

注8

他に、祭の使卷に、「うしかくの預かり」(二〇八頁)は、「牛飼の預かり」の誤りという説もある(「うしかく」は未詳)。「牛飼の預かり」は「牛車の牛の飼育を統括し、牛飼童たちをたばねる責任者か」(新編頭注)とされるが、他にみない用例である。

注9

『落窪物語』新編日本古典文学全集(小学館)頭注。

注10

『大鏡』新編日本古典文学全集(小学館)頭注。

注11

服部幸雄「牛に乗る神と牛飼舎人」(『日本歴史』584号 一九九七年)は、人形浄瑠璃の『菅原伝授手習鑑』に登場する三つ子の兄弟、梅王丸・松王丸・桜丸が菅丞相(菅原道真)の「牛飼舎人」であったという発想がどこからきたのか明らかにしている。菅原道真が「他ならぬ「牛に乗り給ふ神」だとする周知の伝承」を踏まえた上で、そもそも中世、北野社に属した神人のなかに、「大座神人」がおり、彼らが「大座の牛童」「大座の牛飼」(『北野事跡』)「大座神人」として諸院宮、大臣家の牛童(弘安本『北野天神縁起』)と記されており、彼らがこの三兄弟の原型であったと述べる。実頼の童名と関係するというわけではないが、牛が聖物とされたこと、牛飼が神に仕える者として描かれることは記憶にとどめておきたい。

注12

能因本系は「髪あかしらがにて」とあり、その場合は赤毛をいうか。

注13

「かどかどしげなる」には、①ごごごしている②気がきくの二解があり、「牛飼童」の外見をいうか、内面をいうか、読み手の解釈によってかわってくるが、前章段の「小舎人童」に関しても、「らううじき」(利発な感じだ)という内面を賞賛す

る言葉で終わっており、これも内面を表しているであろう。田中重太郎『枕草子全評釈』（角川書店 一九七三年）には「ホワイトカラーでない人も「かどかどしげなる」ことは必要である」と記す。

注 14 金子元臣『枕草子評釈』（明治書院 大正十年）

注 15 『源平盛衰記』には都入りした義仲が牛車に乗った際、かつて平宗盛に仕えていた牛飼童が敵討ち（といっても義仲からかい、しっぺ返し）をする記事があり、牛飼童と主人の関係が決して浅くはなかったこともうかがえる。

注 16 和田英松・佐藤球『栄華物語詳解』二巻（明治書院 明治四十年）

注 17 『枕草子』三巻本に一本として紹介され、能因本に収載される「女房のまゐりまかでは」の段にも、「牛飼童」「牛飼」の両方が用いられているが、異同の多い箇所でもあり、今回は検討しきれなかった。（参考）「女房のまゐりまかでは、人の車を借るをりもあるに、いと心よう言ひて貸したるに、牛飼童、例のしもしよりも強く言ひていたう走り打つも、あなうたてとおぼゆるに、をのこどもの、ものむつかしげなるけしきにて、「疾うやれ。夜ふけぬさきに」など言ふこそ、主の心おしはかられて、また言ひ触れむとおぼえね。業遠の朝臣の車のみや、夜中暁分かず、人の乗るに、いささかさる事なりけれ。ようこそ教へならはしけれ。それに道に会ひたるける女車の、深き所に落し入れて、え引き上げで、牛飼の腹立ちければ、従者して打たせさへしければ、まして、いましめおきたるこそ。」（『枕草子』一本「女房のまゐりまかでは」四六六～四六七頁）。また、『狭衣物語』や『栄花物語』の「牛飼童」の箇所に関しても「牛飼」の異本もある。